

出演者

*は賛助出演ならびに団友

コンサートマスター 三溝 健一

第1ヴァイオリン

加藤 由香里
小菅 宏造
田村 さやか
橋本 土郎
平原 良晃
吉村 理
岩田 貴守*
折原 裕子*
田中 陽子*
増井 健一*
八國生 紗也乃*

第2ヴァイオリン

青木 由美子
泉 紀子
小坂 結
杉山 晴生
洲崎 匡
高松 理恵
田中 教生
藤原 満
水谷 怜
石津 忠*

ヴィオラ

稲田 由佳
清水 哉子
惣塚 弘
古海 法雲
渡辺 みほ
宮入 徹*
横田 裕祐*
鷺北 隆一*

チェロ

稲井 進
上野 敦子
大坪 美樹
笠野 恭子
加藤 史子
佐藤 慎悟
高橋 文子
松下 あゆみ
水澤 由紀

コントラバス

吉崎 須賀子
渡辺 光
庭山 佳代*
松原 直之*
山崎 康正*

フルート

齊藤 孝久
福田 幸久
丸山 恵理
森澤 拓

オーボエ

羽賀 純子
橋本 直子
皆川 正弘
皆川 未央

クラリネット

伊藤 志帆
齊藤 直美
鈴木 和久
富田 洋加

ファゴット

福嶋 梓
宮口 弘明
山崎 真吾*

ホルン

笹川 修一
島岡 美沙
須田 孝義
森 真人
綿貫 英紀

トランペット

菅野 徳嗣
中原 美千佳
水澤 学

トロンボーン

笠野 光雄
松田 彰英
下村 治*

テューバ

若井 一也*

パーカッション

稲田 善智
中原 健二
藤澤 紀章*
綿貫 佳子*

ハープ

鷺北 有子*

楽団紹介

1972年(昭和47年)結成。
毎年2回開催している定期演奏会、
各方面からの依頼演奏や行事への
参加を通じて広く市民に愛されて
います。

上越市を中心に県内各地から音
楽を愛する仲間が集い、質と達成
度の高い音楽を表現すべく、様々
な楽曲に挑戦しています。

2006年「新しい上越市民の歌とベートーヴェン『第九』を歌う集い」にて、上越市出身の指揮者、汐澤安彦氏と共演。

2010年、上越文化会館30周年記念事業「くびき野の歌」に参加、好評を博しました。

現在は指揮者に上越教育大学の長谷川正規氏、コンサートマスターに三溝健一氏を迎え、充実した活動を展開しています。



■次回演奏会のご案内■

第73回定期演奏会

日時：2014年9月21日(日)14:00 開演
会場：上越文化会館 大ホール

サン = サーンズ/交響詩「死の舞踏」
チャイコフスキー/バレエ音楽「くるみ割り人形」より
チャイコフスキー/交響曲第4番

■団員募集のご案内■

上越交響楽団では団員を募集しております。
通常オーケストラで演奏される楽器であれば、どなたでも入団できます。
素敵で愉快な仲間達と素晴らしい音楽を創りましょう。
団員一同心より歓迎いたします。

連絡先 Mail : mako2034@joetsu.ne.jp
Tel : 090-1606-1254(茨木)
ホームページ <http://www5a.biglobe.ne.jp/~jsovn/>

上越交響楽団

第72回定期演奏会

2014年3月16日(日)

開演：14:00

上越文化会館大ホール

主催：上越交響楽団

後援：上越市教育委員会

PROGRAM

ラヴェル
古風なメヌエット

ラヴェル
亡き王女のためのパヴァーヌ

リスト
交響詩「前奏曲」

ベートーヴェン
交響曲第5番「運命」

プログラム&曲目解説

■ラヴェル／古風なメヌエット

ラヴェルが20歳でパリ音楽院の学生だった1895年にピアノ曲として作曲されました。後年に現れる独特の色彩感や精緻な作風はまだ影を潜めています。旋律を短2度不協和音の弱起にするなど斬新な書法が垣間見えます。形式的には主題提示部のメヌエットと、わずかなテンポ変化が指定されたトリオ部による典型的な3部形式で構成されています。主題の旋律は中世ルネサンス期の自然短音階の教会旋法を引用していますが、一方で18世紀の舞曲であるメヌエット様式を用いていることから、本来ならばあり得ない組み合わせであることを曲名で「古風な」と言う形容詞で示しており、単に「古い」と言う意味ではないとされています。ラヴェル独特のユーモアや皮肉を込めた曲名のセンスの初期の例として興味深いと言えます。オーケストラ版への編曲は1929年に行われ翌年に自身の指揮によって初演されています。

■ラヴェル／亡き王女のためのパヴァーヌ

古風なメヌエット同様、オリジナルは1899年の学生時代に作曲されたピアノ曲です。オーケストラ版は1910年にラヴェル自身によって編曲されました。「パヴァーヌ」は16世紀の初期に宮廷で流行した舞曲です。語源の「Pavo」はラテン語で「孔雀」を表しており、この踊りはあたかも孔雀のように高雅にしかも威厳をもって踊られます。曲名の「亡き王女」についてはフランス語の韻を踏むための単なる修飾句に過ぎず、特別な意味は持たないと言われています。導入部なしにやや哀愁を帯びた典雅なホルンの主旋律から始まり、中間部の旋律はフルートとクラリネットから弦楽器に移行し発展し、ほのかに貴族的な雰囲気を残しつつ消え入るように終わります。

■リスト／交響詩「前奏曲(レ・プレリュード)」

交響詩はリストが創始した音楽形式であり、表題として掲げた文学や歴史などの事象を音楽で表現するものです。リストは人間の歴史と本質を普遍的に描いた叙事詩を題材とすることで、人間の本質にせまろうと試みました。戦争が絶えなかった19世紀の不確かな社会や、さまざまな矛盾や苦しみから人間を救済したいという理想と願いの表れがリストの音楽といえます。もともとこの曲は、フランスの詩人オートランの詩による世俗合唱曲「四大元素」の序曲として1845年に作曲されました。その後、詩人ラマルティエヌの同名の詩を使って、標題となる次のような序文を付けて交響詩として初演されます。

§ 人間の生は厳粛な第1音から始まる死への前奏曲(プレリュード)である。純真な愛はすべての生への輝きである。しかしそれは嵐によってさえぎられ、傷ついた魂は静かな大地で平和を求め。しかし人はそのような平和に満足せず、合図のラッパが鳴るとき再び自らのために闘いへと立ち上がるのである。

曲は合唱曲「四大元素」から採った2つの主題による自由な変奏形式をとります。序文に記された愛の美を表現する第1部、愛を破壊する嵐を描く第2部、自然のなかで平和をうたう第3部および、再び戦いへと立ち上がる第4部に大別されます。冒頭主題は特に重要であり、徹底して変奏されることで曲全体に統一感を持たせています。

■ 休憩 ■

■ベートーヴェン／交響曲 第5番 八短調 作品67「運命」

「運命」ほど万人に愛聴されている交響曲はおそらく他にはないでしょう。1800年頃にスケッチがなされ、1807年末に完成し翌1808年に初演の後、第6交響曲「田園」と共に出版されました。原譜はベートーヴェンの愛護家であったロブコヴィッツ公爵とラズモフスキー伯爵に捧げられています。

「運命」は交響曲史上最も重要な様式革命を打ち出した作品です。伝統的に神聖な教会音楽用の楽器とされ世俗的な交響曲には用いられなかったトロンボーンを使っていることや、コントラファゴットやピッコロと言う伝統的編成には無かった新しい響き加わっています。

楽器編成のみならず音楽構成にこそ本質的な革新がなされており、最も重要なのは自身の第9交響曲の様式や後の作曲家にも影響した循環形式の創出です。古典的な交響曲様式では4つの楽章が調性的関連や形式的な規則を持つものの、個々の主題には独立性がありました。ベートーヴェンは「運命」の作曲で主題の統一性を図り、冒頭の運命動機(ダダダーン)を全楽章の明確なリズム動機として用いる手法をとりました。さらに第3楽章と第4楽章を連続させ伝統的に閉じられていた楽章間の壁を開放しました。また、短調開始楽章が長調楽章に到達する音楽構成は、「苦悩」との「闘争」を経て「勝利」に至ると言うベートーヴェンの基本理念を具現化しています。

1808年12月のアン・デア・ウィーン劇場における初演時のエピソードを紹介します。当日の演目は全てベートーヴェンの新作の2部構成で、各部の最初に「田園」と「運命」を、各部の最後にはピアノ協奏曲第4番と合唱幻想曲という大作をそろえ、中間には教会作品やアリアが挟まれたそうです。この演奏会は同時代の作曲家ライヒャルトが「6時半から10時半まで厳しい寒さに耐え座り続けた」と回想したように、あまりの長さや下手な演奏、さらに極寒のウィーンという諸要因によって成功からは程遠いものだったようです。なおベートーヴェンは冒頭の4音動機について「運命が扉をたたくようだ」と語ったとされており、「運命」という標題はこの逸話に由来していますが、今ではこれは秘書のシンドラーによる作り話とみなされています。

第1楽章 アレグロ・コン・プリオ 八短調 2/4拍子 ソナタ形式
冒頭の運命動機だけでは変ホ長調なのか八短調なのか判別できませんが、この曖昧さこそが以降に発展する可能性を持つ、理想的な動機の条件と考えられます。

第2楽章 アンダンテ・コン・モート 変イ長調 3/8拍子 変奏曲形式
2つの主題を用いた変奏曲です。第1楽章のような激しさはなく柔和な感情に支配されます。

第3楽章 アレグロ 八短調 3/4拍子 スケルツォ 終楽章へ連続
地の底からわき上がるような低音の主題で始まり運命動機の変形が扱われます。

第4楽章 アレグロ 八長調 4/4拍子 ソナタ形式
3管トロンボーンとピッコロ(これらは同時期に作曲された「田園」でも用いられます)、コントラファゴットが導入され一気に音域が拡大しクライマックスを築きます。

ごあいさつ

上越交響楽団 団長 古海法雲

本日は上越交響楽団の定期演奏会にお越し下さいまして、真にありがとうございます。

ベートーヴェンの弦楽四重奏曲第16番の最後の楽章のテーマに、「Muss es sein?」(これでいいのだろうか)次に「Es muss sein!」(これでいい)と書いてあります。不思議な暗号の様ですが、同じテーマをリストが「前奏曲」の冒頭で使い、何年前かに演奏したフランクも交響曲の冒頭で使いました。

ベートーヴェンの曲には今回の「運命」の様に大変深刻で「苦悩の後の歓喜」を意識したものが多いのですが、そのような大曲を書き終えた人生の最後に「これでいいのだろうか」「これでいい」意外に楽天的な弦楽四重奏曲が、「実はベートーヴェンは安穏な日々を求めているのかも知れないのでは。」と誤ってしまいます。3年前の東北大震災で幾多の困難に遭いましたが、「何事も無い事が実は素晴らしい事だ。」と、私達に気付かせてくれたのでしょうか。何事も無かった様な日々を長い時間をかけて築いていきましょう。「運命」と今日演奏の曲は、その途中の若い人々のエネルギーと夢に思えます。

指揮者

Hasegawa Masanori 長谷川正規

東京藝術大学音楽学部器楽科(チューバ専攻)卒業。学部在学中に安宅賞を受賞。同大学大学院音楽研究科修士課程修了。ソリストとして、松尾葉子指揮藝大フィルハーモニア、故岩城宏之指揮オーケストラアンサンブル・金沢とR.V.ウィリアムスのチューバ協奏曲を共演した。チューバ奏者として管弦楽・吹奏楽・室内楽の領域で活動する傍ら、近年指揮の機会も増えてきており、新潟県・上越文化会館30周年記念創作音楽劇「くびき野の歌」、新潟市北区文化会館開館記念オリジナルミュージカル「春のホタル」、新潟市南区音楽祭プロジェクト「ヘンゼルとグレーテル」などの指揮を担当。新潟市・北区フィルハーモニー管弦楽団音楽監督、上越交響楽団指揮者。これまでにチューバを稲川榮一氏に師事。現在、上越教育大学大学院学校教育研究科専任講師。



コンサートマスター

Samizo Ken-ichi 三溝健一

長野県松本市にて4歳よりヴァイオリンを始め、正岡紘子、天満敦子、山岡耕祥の各氏にヴァイオリンを、東京音楽大学にて井上將興氏にヴァイオリン及び室内楽を師事する。また、肥沼きよ、竹内邦光、丸山嘉夫、松本紀久雄、汐澤安彦の各氏にピアノ、ソルフェージュ、音楽学、指揮法を師事する。大学在学中から、ソロ、室内楽、オーケストラ、オペラ等、幅広い分野で演奏活動を行う。殊に室内楽では「ENSEMBLE“藝弦”」(弦楽合奏)と「室内楽“EAU”」(ピアノアンサンブル)を中心に研鑽を積み、現在は「音泉室内合奏団」を主軸に活動を展開、編曲も多数手掛けている。また、関東～信越各地の市民・学生オーケストラにおいて指導者として活動の発展に尽力、初心者から専門課程の学生及び演奏家の個人レッスンや室内楽のグループ指導など広く後進の育成にもあたっている。

足立シティオーケストラ／常任コンサートマスター，副指揮者。松本交響楽団／客演コンサートマスター，副指揮者。上越交響楽団、柏崎フィルハーモニー管弦楽団、他／客演コンサートマスター，トレーナー。音泉室内合奏団／ソロ・コンサートマスター，音楽監督。池袋音楽学院講師。“Gruppo Violini”主任講師。

